

# 十一月の觀察

堀 七 藏

十月・十一月は收穫の時期である。稻の收穫が最も重要なものであるが、大豆でも小豆でもまた粟でも、更に里芋でもさつまいもでも、大根、牛蒡等の蔬菜類でも皆收穫の時期である。

故に八百屋ひやうや、つこ、果物屋くだものや、つこなぎを中心として、いろ／＼の觀察作業を行はせるがよい。單に眼で見ただけでなく、凡ての感覺器官を働かす直觀を行はしめ、直觀し印象したものを發表作業させねばならぬ。八百屋なり果物屋なり、またマーケットなぎを觀察して、店に竝んでゐる野菜類、果物類なぎの名稱、形狀等を直觀させ、更に農園に於ける栽培收穫の實況を直觀させねばならぬ。そして直觀したるところを繪に發表させ、また粘土や厚紙等で製作させ、それ等を陳列して八百屋ひやうや、つこ、果物屋くだものや、つこなぎ等の綜

合的な遊びさせねばならぬ。

またいろ／＼の草の實、樹の實等を採集させ、蒐集せしめて遊びの材料となし、觀察の材料させねばならぬ。さぐりの獨樂、じゆづだまのくさり、つばきの實、茶の實なごでも藤の實なごでも、いろ／＼面白ものが幼児につくられるから觀察のよい作業となる。

また草原を歩くこ、ひのこづち、ぬすびこは、なごの草の實が着物にいたり、種子をはちきちらすものなごがあるから、それ等を随時幼兒に觀察させるがよい。従つて十一月、お天氣の日には成るべく幼兒を外に引率して自然物を對手とする外遊びを十分行はせねばならぬ。

十月から十一月にかけて、所謂秋咲く花が大變に多いから、是等秋咲く花を觀察させねばならぬ。コスモス、ダリ

ヤ、菊、けいごう、サルビヤ、日々草等の花はよい観察の材料となる。コスモスでもダリヤでもまた菊でも所謂頭狀花で、多くの小さな花が頭狀花序をなしてつき、總苞で包まれてゐる。一寸見るに、この總苞が萼のやうに思はれる。しかし萼ではない。

一つの花の如く見えるものを割開いて、これを成せる小さな花を一つ／＼取出して見るに、周りに着ける花は中心に集り着ける花とは、概ね著しく相異なつてゐる。周りの花の花瓣は大きく長くして、本は管をなし先は一枚の扁たきものになつてゐる。中心の花瓣は小さく短き管をなし、先は少しく五つに分れてゐる。これ等の花には何れも萼がない。花瓣の管の中に一本の雌蕊があり、その先は二又に分れ、本は花瓣の下方に橢圓形をなして膨れてゐる。中心の花には雌蕊の中程を鞘の如く圍みて雄蕊の囊がある。そしてこれより黄色な花粉を出す。しかし周りの花には雄蕊がない。

菊は昔より花を觀賞する爲に作られ、その爲に多くの培養變種が出来てゐる。花の集りの大いさには徑三糎位にす

ぎないものがあり、又十五糎以上のものもある。花瓣の色には黄、白、紅なきがある。また裏と表との色の異なるものもある。又周りの花が少くて中心の花の多いもの、周りの花が多くて中心の花の少ないもの、又殆んど周りの花のみから成れるものもある。又周りの花の花瓣が殆んど全部扁たきもの、半ば扁たく半ば管をなせるもの、又殆んど全部管をなせるもの等がある。

菊でもダリヤでもその花の構造につき八釜ましく觀察させることが困難である。けれども花の色や形状等を比較させつゝ、觀察させ異同を明白になすがよい。

### 三

十一月には萬木紅葉して落葉するまきである。紅葉するもの、黄葉するもの等、いろ／＼の木の葉を採集させて比較させるがよい。色ばかりでなく、葉の形状、大小等も比較して觀察させるがよい。落葉する樹木は落葉せぬ常緑木との名稱を調べさせるもよい。勿論幼稚園の庭、またその附近にある樹木の全體の形を寫生して厚紙で切抜かせるもよい。

秋の木葉はその上に蠟を塗つて保存するこゝが出来、それでバラフィンを熱してきき、筆にバラフィンをつけて木の葉の両面に塗り、その木の葉を紙に貼付けて保存させてもよい。

落葉した後に芽のあるこゝがよく分る。常緑木でも葉になる芽、花になる芽がある。さざんくわやつばきを觀察させ、さくら、うめ、ももなぎの芽を觀察させるもよい。しかし六ヶしいこゝを説明するこゝは無用である。

#### 四

十一月には球根なごを幼児に栽培させるがよい。アネモネ、ヒヤシンス、チウリップなどは十一月初めまでに植ゑねばならぬ。防寒防霜のために粗殻や藁で被をなすもよい。チウリップ、ヒヤシンス、黄水仙、水仙類はその球根を花壇に栽培するもよいが、ヒヤシンス、支那水仙、水仙類は小石を入れた水鉢でよく成長するから、幼児にも根の成長が觀察出来て面白い。是等の球根を数日間涼しい暗處に置き、根が出て成長し初める三日の當る所に出して置くのである。また小さな瓦鉢に普通の土を半分ばかり充し、球根の

太い所を下にして置き、球根の尖端が僅かに現はれる位、鉢に一杯土を入れる。そして根の出るまでこの鉢を暗い冷い處に置く。一週二回規則的に水を與へる。しかしあまり濕してはならぬ。葉が七八程に伸びたならば、明い所に鉢を出す。是等の球根の鉢は幼児に世話させるがよい。

#### 五

秋になるころの鳥を觀察させるこゝが出来。きじ、やまざりでも、またがん、かもでも幼児に觀察させるこゝが出来。すいめ、きじ、やまざりなごは留鳥といつて、一年中同一地方に留まるものである。しかし是等でも夏と冬とでは多少その棲むところを異にする。木の實を食してゐる小鳥類が秋になるこゝよく目につくものである。その鳴聲や色彩なごをよく觀察させるがよい、がん、かもなごは冬鳥と稱し、我國より北の方で巢をつくり、雛を育て、繁殖し、秋我國にわたつて来て冬を越し、翌春再びもこの繁殖地に歸つて行くものである。夏鳥のつばめ、ほみこぎ、すい反對である。

幼稚園の庭に小鳥を呼ぶ工夫をする面白い。小鳥は餌

で二種に大別出来る。草や樹の實を食するものゝ蟲を食するものゝである。蟲を食する小鳥を呼ぶには、干魚ミか動物の脂肪などを適當な大きさにちぎつて、お庭の樹木にひつけて置くがよい。するさきつつき、おじふから、しじふから、やまがら、うぐひす、めじろなごが、その餌を食するため庭に集つて来る。

また植物の種實を食する小鳥は多く穀類を好むから小麥、そば、麻、きび、稗、粟などを庭にまいて置くがよい、秋から冬にかけて小鳥類は餌を求めて人家の附近に集まるから、小鳥の觀察が容易になる。保育室に小鳥の掛圖を提出し置き、幼児が見付けた小鳥を比較觀察させる面白。秋から冬にかけて保育室に小鳥を飼育させるもよい。夏では、臭氣があつて困るが、秋になるさ差支ない。

## 六

秋十一月になれば、露や霜を觀察させることが出来る。露は大氣中の水蒸氣が氣溫の下降によつて飽和に達し、更に氣溫の降下によつて凝結し水滴なるものである。それで夜露を稱し、日没後氣溫が急に降下するために既に露を

生ずる位である。朝方午前四五時頃最も氣溫が降下するときは、朝露しげくさいふ有様である。若し氣溫が零度以下になれば、大氣中の水蒸氣は直に氷片になつて霜を生ずるものである。そこで露でも霜でも雨や雪の如く降るものではない。そんなところに霜が多く出来るか、露が多く出来るかを觀察させそんな夜に露や霜が出来るかなども注意させるがよい。曇つた夜には露も霜も出来ず、晴れた夜に露を生じ霜が出来ることを注意させるがよい。

## 七

十一月になれば昆蟲の如き動物は蛹が卵になつて冬を越す準備をなし、かたつむり、かへるなごは土中にもぐつて冬眠をなし、鳥獸類もそれ／＼越冬の準備をする。植物は果實種子となり、また落葉したり地上の莖葉が枯れて何れも冬を越す用意が出来る。人間も衣服に於て住居に於てそれ／＼冬の準備をなす有様を觀察させるがよい。幼稚園の保育室はそれぞれ暖房装置が出来る。暖房装置の觀察をなさしめると共にそれに對する注意を指導せねばならぬ。火鉢ならばその構造から木炭灰、火をおこす有様等を觀察さ

せ火鉢に對する注意を指導せねばならぬ。ストーブならばストーブの構造、煙突、水盤等の觀察から石炭の觀察も必要である。勿論ストーブに對する注意も十分指示せねばならぬ。庭を掃き集めた落葉を燃して火の觀察をなさしめる

こまもよい。所謂焚火は幼児には興味の多いものであり焚火でさつまいもなどをあぶつて食せしめるこまも一興である。しかし是等の機會に於て十分火を玩弄しないやうに訓練せねばならぬ。

## 自動車利用の園外保育につきて

城東幼稚園 脇屋直

當園にて自動車を利用し、園外保育を致しました最初

事に定めました。

は、昭和二年六月にて、この時は自動車にて豊島園へ参りましたが、其後暫らく中止致してをりました。現在當園は小學校の一部を使用致し、幼稚園は名のみにて、専用の庭園もなき慘さ、然し子供は小學校の運動場にて、毎日嬉々として遊んで居りますが、私共が考へますに如何にも可愛想で、園外へ連れ出したこの心むらく起つて参ります。園長は幸ひ園外保育に就きまして御理解下さいますので、昭和六年四月より經費の許す限り、又園外へ連れ出す

園外へ参ります時、保姆の注意する第一の要件は、子供に少しの疾病でもありました場合は、團體の仲間へ入れぬ様、堅く保護者に注意致して置きます事でございます。引率する幼児は學齡前(年長組)の子供、場所は近い所を選定致します。附添人なしで保姆と共に外出をする事は、保育上價值多き事と信じます。それ故遠方へ行く事は希望致しません。自動車は客用大型の自動車なれば、一臺幼児十二名は乗車出來ます。大抵幼児は二十五名位、附添として保